2017年3月10日 志茂田景樹

wikipedia 本人確認

ウィキ直し！

Wikipediaのページをその本人（またはそれに準じる人）に見せ、訂正・補足してもらい、それを掲載したこのブロスが世の中に流通することで、より正確な情報がWikipediaに反映される（かもしれない）、というコーナーです。

志茂田景樹 -Wikipedia

http://ja.wikipedia.org/wiki/志茂田景樹　　2017年3月10日現在

志茂田景樹

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

志茂田 景樹（しもだ かげき）	
本名	下田 忠男 1940年3月25日(76歳) 日本 静岡県伊東市
職業	小説家、絵本作家、タレント
最終学歴	中央大学法学部
活動期間	1976年 - 2017
ジャンル	架空戦記、推理小説、歴史小説、伝奇小説など
代表作	『黄色い牙』(1980年) 『戦国の長嶋巨人軍』(1995年)
主な受賞歴	小説現代新人賞(1976年) 直木三十五賞(1980年) 文芸大賞(1984年) 日本文芸家クラブ特別大賞(1994年)
デビュー作	『やっとこ探偵』(1976年)
子供	下田大気
公式サイト	志茂田景樹ワールド

伝奇小説　後　時系列　架空戦記　高価格　尾　精神的　執筆　日本絵本賞読者賞　苦痛　乗　現代新人賞　受賞　長男　順洋　次男　大気

伝奇小説の後に持ってきて欲しい（時系列）なので

代表作？？？ 代表作、ムンデモ作品が傾向あり。

次男順洋 次男大気

ペンネームの由来は、「茂る田んぼを志す」という気持ちから変名し、また「景樹」は昔父親の書斎で良く目にしていた本に江戸時代の国文学者、香川景樹の本があり、その賑やかな名前が気に入って拝借したという。また、一時期は境 忠雄（さかいただお）のペンネームを使用していた時期もあった。

下の忠男 盛り上がる。 志茂田景樹 盛り上がる。

人物・来歴　　結構 ちょっとたいへんよかったペンネームです。

1940年、静岡県伊東市に生まれる。東京都立国立高等学校を卒業後、一浪を経て中央大学法学部政治学科に入学。

2年浪人しています。

高校時代は映画研究部の部長。学生時代は映画研究部で、エキストラをやっていました。大学の5年間で本は読んでいましたが、小説本は3冊しか読んでいません。

学生でいちばん小説を読まなかった時代です。

6年かけて卒業した後は弁護士事務所に就職するも、その後はセールス、探偵、保険調査員、塾講師、週刊誌記者など、20種以上の職を転々としてきた。28歳の保険調査員時代に地方出張の移動時間を利用して読書をしているうちに作家を志すようになり、29歳の時虫垂炎と腹膜炎で長期入院したことをきっかけに短編の執筆を開始、それから仕事の傍ら作品を応募し続ける。

作家を志望するようになって職業も結婚に縁の深いものに変わっていきました。業界紙記者、テレビ局に就職、週刊誌アンカーライター、フリーライターを経て小説現代新人賞を受賞しました。

1980年（昭和55年）、国鉄職員だった父が北海道に赴任した際に聞いた話をもとに書き上げた大作『黄色い牙』で直木賞を受賞した。

はじめは北海道が舞台のヒグマを狩る猟人の話にするつもりでしたが、最後を舞台にツキノワグマを狩るマタギの話にしました。

保険調査員時代にマタギの里を訪れているので書き地すかったからです。

ジャンルを問わない多様多彩な作品世界を構築し、その執筆スピードの速さもあいまって矢継ぎ早に発表して読者の支持を集める。特に、『孔雀警視』は女性キャリア捜査官もの としては日本の嚆矢であり、しかも続けてこの職種を取り上げたフィクションがリアルなものが多かったのに対し（近年はようやくコミカルなものもエロティックなものも増えてきている）軽いエロティックアクションに徹している点など、先見性と独自性が際立っている。

孔雀警視シリーズは僕の作品のなかでもっとも版を重ねた人気シリーズでした

志茂田は『警視総監・鳳美由紀』ではこの路線をついに（しかもお色気アクションのまま）警察官最高職にまで推し進め、これは四半世紀を経た現在も未だに（映像・劇画もふくめ）フォロワーが出ていない。

鳳美由紀は中断したシリーズの主人公ですが、少し恋いが残っています。

1990年代には架空戦記小説を多数執筆、ブームの牽引者となる。分かり易さ、面白さを追求し、特に『戦国の長嶋巨人軍』はカルト的~~人気を博して重版を重ね~~、多くの作品がブームの衰退と共に個別の作品名を忘れられてゆく中、架空戦記の金字塔となった。

なく作品でしたが

当時当初はあまり関心を呼びませんでした。

架空戦記のブームが去ってから本ベストで話題になり、

それないまだに尾をそりいて古書が高価格で取引されています。

キャラクター性も抜群であり、本人もタレント活動にも積極的で数多くのバラエティ番組、ドラマなどにも出演した。

バラエティーは執筆が内側に閉じていく精神的作業であるのに対して、自分自身をそのまま出せばいいので、執筆とのバランスがたいへんよかった。仕事と思ってやったことが多かったです。

ただ、だんだん苦痛になってきたのはこれを仕事という義務感が強くなったからです。休業のない日はほんとにほっとしたことを覚えています。

当然出演時の衣装はすべて自前である。

はい。150%自前でした。

『笑っていいとも！』レギュラー時代に志茂田が登場する時には、**「直木賞作家 志茂田景樹」**とクレジットされていた。また、『いいとも！』では1992年（平成4年）の特番「笑っていいとも！年忘れ特大号」のコーナー、ものまね歌合戦にて小泉今日子の「なんてったってアイドル」を歌った。

でも、いちばん多く歌ったのは「路子にしゃがれ」でした。

今もカラオケでは、「二人のセゾン」「ないでジャンプー」などにもよく歌っています。

唄うことが大好きで、カラオケで熱唱するのが楽しいという。また自らの講演会でも唄を披露している。

興に乗るように、突然歌いだすことがあります。

本人が近年、Twitterでカミングアウトしたところによると、幼い頃の疾患により、音楽を聴き、表現する能力が劣ってしまったという。

5歳時に中耳炎をこじらせて右耳は健常者の80%、左耳は健常者の70%の聴力です。

こうしたタレント的な活動で注目されていた当時の執筆作品の多くが、口述筆記であったことを公言している。

多忙を極めていたときは車移動、新幹線移動の時間はマイクロカセットテープレコーダーに吹き込む最適の時間でした。当時、新幹線には個室がありました。

以後、テレビタレント活動、小説執筆をセーブし、自ら全国各地で読み聞かせ行脚を行い、童話・絵本執筆も手がけるほか、不登校の子どもたちの支援や心療内科を考える会など、社会的活動にも熱心~~である~~。した。

現在は年1、2回の移動地域を続けています。

2008年（平成20年）、専修大学の創設者たちを描いた歴史小説『蒼翼の獅子たち』を刊行した。

この作品は学校をつくろう」と改題されて映画化になりました。

「例幣」「激動の1750日」に続く創価学会作品の映画になりました。

2014年（平成26年）事務所で、金庫の鍵を壊され6,000円盗まれるという事件が発生した。

未だ犯人捜査中ですが、警察に捕まる前に真人間になってほしいと、テレビで言ったので真人間になってしまったのかもしれません。